国文学会（十二月二日・教育文化センター）

平家物語における死をめぐって　生形貴重

高校の文学史　岸健治

昭和四十七年度卒業論文題目

〈日本文学古代前期〉

万葉集東歌　春日みち子

持統朝の詩人―人麿　加藤礼子

防人と防人歌　高良真理子

山上憶良憶論　宮崎京子

山上憶良　中西順子

高橋虫麿　西原啓子

大伯皇女論　佐藤静子

大伴旅人の讃酒歌と中国文学　佐藤千明

高市黒人　安田昭子

山上憶良論　安田典子

家持のみやびについて　小西啓子

記紀歌謡―詩の発生から抒情詩まで　鈴木裕

叙景歌の成立　横山満智子

〈日本文学古代後期〉

源氏物語　広田収

同志社大学国文学会彙報

昭和四十八年度国文学会役員

会長　土橋寛

常任委員　南波浩、小森啓助、安永武人、松下貞三、壬生博士、黒沢幸三、生形貴重、金子彰、巽康真、谷口廣之、藤井房子、谷口文雄

評議員　二十八名

昭和四十八年度国文学会活動状況

国語教育研究会（六月二十四日・府婦人センター）

文法教育　浅野敏彦

中学の国語教育　常田みち子

高等学校の文学教育　松井秀幸

教育問題懇談会（八月一日・教育文化センター）

廃校問題に直面して　吉岡幸子

養護学級からの問題提起　壬生博士

国語のグループ学習　府立大江高校グループ学習研究会

枕草子について　藤本啓子
藤壺事件　中村恵子
若菜上下の巻について―六条院崩壊の構造―　西尾潤子
紫式部日記に見られる宮仕え生活　西岡とも子
宇治十帖―浮舟物語の世界―　杉本勝美
紫式部の人間像　赤田欣子
源氏物語若菜・柏木の巻　上田記子
和泉式部日記論　岸本和子
光源氏物語論　沢井道夫

〈日本文学中世〉

方丈記―中世に於ける時代思潮を追って―　福崎進
西行―その求めた生き方と和歌―　石川豊子
狂言の笑い　川井万里
平家物語論―その「語り」の意味について―　生形貴重
狂言論女狂言之類を中心にして―　茂木啓子
定家・西行・長明三様の意匠
―中世文学の出発点を尋ねて―　大野博郷

〈日本文学近世〉

近松の心中物―「曽根崎心中」と「心中天の網島」を中心に―　服部いく代
「奥の細道」における私小説性　東野利明
日本永代蔵　藤浪照子
「心中天の網島」について　片城佐和子
「世間胸算用」考　川崎栄美子
近松の世話浄瑠璃―心中物における一考察―　栗谷佳代
「冥途の飛脚」考　楠小夜子
「曽根崎心中」の成立　中村裕巳
「東海道四谷怪談」の悪と怨念　中冨えり子
「雨月物語」の怪異性　小倉啓子
芭蕉と「野ざらし紀行」　高野道子
「万の文反古」　山田裕子
近松の心中物　山口莞子
近松世話物の変遷　善甫司郎
西鶴町人物考察　中田多鶴子
「本朝二十不孝」私見　山崎劭
「日本永代蔵」の致富論について　曽田美子

〈日本文学近代・現代〉

島木健作　長谷川　みどり
小林秀雄「ランボオ体験」序説　林　建紀
芥川龍之介についての考察　池田和子
井上光晴文学の軌跡　川下哲男
児童文学と斉藤隆介　梶田星子
高等遊民について　小松伸二
深沢七郎小論　松田恵以子
「或る女」試論—自我の問題について—　森本京子
「行人」について　守屋早苗
太宰治論—道化の文学—　奈古屋雅子
椎名麟三論　大崎絹子
梶井基次郎　大島育子
夏目漱石論—漱石における自己と他者—　斉藤裕久
武田泰淳論—「相対化」の文学—　高司佳子
彷徨の果てに—宮沢賢治の童話人物デクノボーを追って—　武田道子
三好達治詩集「淵量船」研究　竹内純子
芥川龍之介の女性観—作品に現われた女性像を通して—　滝真澄
安部公房の「壁」までの初期作品—実存的なものを方法としていかに生かしたか—　田中満昭
有島武郎「或る女」論　安田直子
夏目漱石論—〈自己本位〉の変容をめぐって—　吉田栄治
「道草」について　冨田信喜
三島由紀夫論—エゴチズムの美学　松村和夫
明治の知識人としての夏目漱石　長井信夫
野坂昭如論　小倉正年
鷗外・歴史小説の深層部　大塚政樹
「破戒」論　田中義春
中島敦小論　霜田勇二
有島武郎論　福島正雄
安部公房　井上裕之
三島由紀夫論　清水正治
織田作之助論　尾野実信
芥川龍之介「鼻」について　久世ひろみ
芥川龍之介「大導寺信輔の半生」試論　石原則男
宮沢賢治童話考—ペンネンネンネン、ネネムの伝記—　沖増久美子

大杉栄論　今竹美佳

〈国語学〉

鬼の研究―仏教説話を中心として―　雲下明子

日本書紀にみる古代人の用いた「善」の構造　牧野啓子

日本書紀に見る古代の「悪」の構造　中川圭子

常世国考　斉藤玲子

「のり」の考察　瀬戸美恵子

『東海道中膝栗毛』の文体　椎野順子

なお、本誌は四十八年十二月刊行の予定であったが、諸般の事情により遅れたことをおわびする。（K）

編集後記

この第九号も前号につづいて若い方の投稿が目立つ。寺川真知夫、広田収、星田公一、生形貴重、生井武世の諸君は初登場で、それぞれ新鮮な論を展開している。やや説話に傾いた嫌いはあるが、古代、中世、近世、近代にわたって論文が揃ったのも本号の特色であろう。次年度は『同志社国文学』が誕生して丁度十年になる。さらに一層の充実が期待される次第である。紙不足のニュースを聞きつつ編集を進めているが、次号は洛陽洛外の紙価を高めるような力作を掲載したいものである。